



2018年1月1日発売の
月刊ギャラリー1月号 37pに
川端健太個展が紹介されています。

と会覧展
アーカイブ
4

ポストトゥールズ時代、写実とは



東京・京橋のかわうそ画廊で昨年行った「かわうそ新人賞」。その第一回公募で最優秀賞となった川端健太（1995）が、今年1月に初個展を開く。現在、東京藝術大学絵画科油画コース3年に在籍。高校まではバスケット部に所属し、3年の進路選択時にアメリカハイパーリアリズムの巨匠、リチャード・エステスの写実画と宮崎駿の手書きアニメに惹かれ絵画の道を進み始めたという。昨今、写実画は美術界で大ブームの様相を呈すが、マンネリとなっ

川端健太個展

1月20日→1月26日
銀座かわうそ画廊（京橋）⑰



《untitled》2017
パネル、黒鉛、アクリル絵具M10号

てきた部分もある。川端自身も、やっていることは写実画とならざるをえないので、その中でいかに差をつけるかと続けている。「例えば美人をモデルにするのではなく、私は身近な人を描いています。また、写真だと最近ではフォトショップなどで加工し肌の荒れなど消すこともできますが、私はあえてそれを描いています」



《隙間》パネル、黒鉛、アクリル絵具 550 × 440mm（変形）

操作し理想的に作りあげられる時代。だが、おそらく川端の絵画は、そのような時代にあって人間のリアルを追求する写実の系譜になっっている。初個展の意気込みを川端はつぎのように語った。

「まだ模索中ですが、気になっただけであつたり自分の視点を取りいれて絵を描きたいと思っています」

写実で描くという以上に、どのようなテーマを深掘していくか。注目の作家である。